

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 5 月 14 日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2021

課題番号：18K00273

研究課題名(和文) 山東京伝の吉原文化圏に関する研究 - 柳沢米翁の俳諧交友と大名の茶道交流の解明

研究課題名(英文) Research on the Yoshiwara Cultural Area of Santo Kyoden - Understanding Yanagisawa Beio's Friendship in the Haikai Field and Interactions over Tea Ceremony with Daimyo Lords

研究代表者

鹿島 美里 (Kashima, Misato)

北海道大学・文学研究院・専門研究員

研究者番号：00609068

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円

研究成果の概要(和文)：山東京伝と深い繋がりを持った大名俳人柳沢米翁の俳諧活動について米翁の俳諧宗匠前田春来(二世青娥)との係わりから考察した。春来は其角・嵐雪の俳風をもとにする江戸座俳諧を目指し、春来が江戸俳諧に大きな影響を与えたことを明らかにした。さらに山東京伝のパトロン松平雪川の兄松江藩主松平不昧と吉原者らが係わった茶道具の伝来の調査を行った。山東京伝の『通言総籙』に登場する茶道具から、兄不昧も茶入を購入した人物のモデルとして描かれ、不昧とも京伝が文化を共有していたことが分かった。さらに吉原の大黒屋庄六が茶道具御所丸を所持しており、茶道具を介した吉原の文化交流が吉原で行われていたことを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

山東京伝の作品読解の鍵となる吉原文化圏を解明するため、山東京伝と係わりの深い大名俳人柳沢米翁の俳諧活動との調査を行った。大名俳人の重鎮であった米翁の俳諧宗匠は前田春来(二世青娥)を師としており、蕪村や存義ほど重要視されていない人物であったが、其角後の宝暦期の江戸俳壇においてその地位を獲得し、新しい江戸俳壇の流れを生み出すこととなる重要な位置を占めていたことを指摘した。さらに京伝の洒落本に描かれた茶道具から、松江藩主松平不昧や吉原者との繋がりを発見したことは、本研究の独創的な点となった。吉原を中心とした大名子弟の俳諧交友と茶道が当時の文化を形成していったことを指摘した。

研究成果の概要(英文)：I considered the haikai activities of the Daimyo lord poet, Yanagisawa Beiou, who has a deep connection with Santo Kyoden, from the relationship with Beiou's haikai master, Syunrai Maeda (Nisei Seiga). I revealed that Syunrai aimed at Edo-za haikai based on Kikaku and Ransetsu's haikai style and greatly influenced haikai in Edo. In addition, I investigated the introduction of tea utensils in which Santo Kyoden's patron, Matsudaira Setsusen's older brother, Matsue Feudal Lord, Matsudaira Fumai, and Yoshiwara, and others were involved. From the tea utensils that appear in Santo Kyoden's "Tsugen Somagaki," it was found that his brother, Fumai, was also depicted as a model of the person who purchased the tea ceremony and that Kyoden had shared the culture with Fumai. Furthermore, it was revealed that Daikokuya Shoroku of Yoshiwara possessed the tea utensils Goshomaru and that cultural exchange through tea utensils was taking place in Yoshiwara.

研究分野：近世文学

キーワード：山東京伝 江戸座俳諧 柳沢米翁 前田春来 茶道 松平不昧

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

江戸時代後期に活躍した戯作者の第一人者である山東京伝(宝暦十一年 1761 ~文化十三年 1816)は、黄表紙・洒落本・読本・合巻・考証随筆など多岐に渡るジャンルで才能を発揮した人物である。特に黄表紙・洒落本では当時の政治、社会、経済や世相諷刺が笑いの種として描かれ、政治情勢、文化背景の理解がないと京伝の作品解釈が難しいことが課題となっている。そこで山東京伝作品に最も影響を与えたのは、江戸の吉原文化であり、吉原文化そのものが江戸文化圏の基盤を形成していることから、吉原文化圏の解明を行う必要があると考えた。しかし吉原文化の詳細については、解明しなければならない事項が多く残されている。そのため本研究では、吉原文化の一つが大名家子弟をパトロンとする江戸座俳諧とその俳諧交友から生まれた茶道による大名と吉原の交流が重要な文化であることから、吉原に深く係わり、京伝と文化圏を共有した大名俳人柳沢信鴻(俳号米翁)の交友関係と、京伝作品『通言総籙』に描かれた大名と吉原の茶の湯での繋がりについて調査・分析を行うこととした。これにより山東京伝に影響を与えた吉原文化圏の解明がなされると考えた。作品を生み出す文化背景が明らかになることによって、江戸後期文学・文化の本格的な解釈を進展させるのが本研究のねらいである。

本研究は、平成 24 年度～平成 26 年度科学研究費助成事業による「山東京伝の江戸文化圏解明に関する研究—松前文京の文芸活動について」(課題番号 24720087)、平成 27 年度～平成 29 年度科学研究費助成事業による「山東京伝の江戸座俳諧に関する研究—柳沢米翁・本多清秋ら大名俳人の俳諧交友の解明」(課題番号 15K16677)の研究の延長線上にあり、これらの研究で得られた成果を受け、山東京伝が係わった吉原文化圏を解明しようとしたものである。これまでの研究で柳沢米翁の俳諧交友では、江戸米翁と親しい江戸座俳諧宗匠菊堂の師である亀成が戯作界と江戸座俳諧を繋ぐ重要な人物であることを追善集『妙智力』を中心として明らかにした。しかし米翁の俳諧活動全般についてはまだまだ解明されていない点が多く、そのため、山東京伝と係わりの深い大名子弟や藩士、米翁の俳諧の師である春來、米仲を中心に調査することにより、宝暦期の江戸俳壇がいかなる意味を持つのかを位置づけようとした。

さらに俳諧と茶道との繋がりについて、これまで石塚修氏『西鶴文芸と茶の湯』(2014)や藤田真一氏「茶の湯と中興俳諧 変容する文事と茶事」(2009)などがあるが、京伝と吉原文化を中心とする茶道との繋がりについては解明されてこなかった領域である。そのため代表者は、大名茶人で有名な松平不昧が、京伝のパトロンの一人である松平雪川の兄であることに着目し、松平不昧の茶道具を中心に調査を続け、京伝の洒落本『通言総籙』に登場する茶器の一つを不昧が所持していたことを発見した。さらに吉原者が所持した名物茶碗の伝来調査を行うことによって、吉原者と豪商、大名子弟が茶道を通じて江戸文化を形成していたことを分析していく。京伝作品から吉原文化を中心とした江戸文化圏の解明を行うことで、京伝作品解釈が進展させ、江戸後期文学読解の基盤になることを目指した。

2. 研究の目的

山東京伝の作品を解読する鍵となる吉原文化圏を明らかにすることを本研究の目的とした。山東京伝の文化圏に影響を与えた吉原文化が、大名子弟をパトロンとする江戸座俳諧と、その俳諧交友をもとにした茶道による大名と吉原者の交流といえる。そのため山東京伝と深い繋がりを持った大名俳人柳沢米翁の俳諧交友活動と山東京伝のパトロン、松平雪川の兄松江藩主松平治郷ら大名が係わった茶道具の伝来調査を行うことが必要であると考えた。大名の俳諧交友と大名と吉原者の茶の湯における繋がりに、京伝の吉原文化圏を解明することができると考えた。

- (1) 山東京伝と係わりの深い同時代の大名俳人柳沢米翁の俳諧交友関係の解明を行うことを目指した。大和郡山藩主柳沢米翁は大名俳人や江戸座俳諧宗匠と深く係わり、俳諧活動を行っていた有名な大名俳人である。その俳諧関係の記事を『宴遊日記』、『松鶴日記』、『美濃守日記』に記しており、ここから大名と江戸座俳諧宗匠の俳諧交友関係が見えてくると考えた。これら米翁の日記は伊勢神戸藩主本多清秋ら大名や江戸座俳諧宗匠の俳諧交友が綿密に記

されており、このうち米翁の俳諧宗匠であった前田春來(二世青蛾)の係わりに注目することにした。特に春來が江戸俳壇の復活を目指した『東風流』を中心に調査・分析を進めることによって当時の俳壇の勢力や江戸座俳諧の位置付けを明確化できると考える。米翁は春來とその弟子の米仲に指導添削を受けおり、米翁の俳諧サロンには姫路藩主弟酒井抱一や秋田藩留守居役の佐藤晩得も通っており、これらの交友関係を明らかにすることにした。米翁は大名俳諧を牽引する人物であり、米翁の交友関係を解明することは、当時の俳諧を基盤にした大名子弟、江戸座俳諧宗匠、戯作者を結ぶ交際関係が分かり、当時の京伝作品を生み出した文化圏を解き明かすことが可能になると考える。

- (2) 大名や吉原者が係わった茶の湯から吉原文化圏の解明を行うことを目的とした。俳諧交友をもとにした大名と吉原者が係わった茶の湯の交流関係を明らかにする。京伝のパトロンが大名子弟松平雪川らであったことからその文化圏を考えると、当時大名の文化交流として、俳諧と茶道は欠かせないものであり、大名が係わった茶道具の伝来を調査することは、吉原文化圏を明らかにするために重要な課題と考える。京伝の洒落本『通言総籙』では名物茶入の話題が記され、作品の中に登場する茶入の一つが松平雪川の兄、松江藩主松平治郷所持であることを発見した。また治郷の茶道具収集を行っていた懇意の商人松屋権兵衛も柳沢米翁のもとに出入りしていたことが米翁の日記に記されている。さらに京伝の後援者の一人であった酒井抱一の兄姫路藩主酒井忠以(宗雅)は茶の湯を松平不昧に学んでおり、忠以所持の茶道具は没後、不昧へ譲られ雲州名物のもとなっていることも、茶道での交流関係を示している。これら松江藩主・姫路藩主ら大名との係わりについて、京伝作品に見られた名物茶入の伝来調査をし、そこから京伝との係わりを明らかにする。加えて『通言総籙』に見る吉原に係わる人々の所持した茶道具と交流関係の解明を行う。山東京伝の『通言総籙』で吉原見番創設者の大黒屋庄六(俳号秀民)が茶人の間で珍重された高麗茶碗の「御所丸」、「金海」を所持しており、その伝来の経緯を酒井抱一が『軽拳観句藻』で記している。ここからも吉原文化がいかに江戸の文化を牽引していたかが分かる。そのためこれらの名物茶碗について伝来調査・分析を行う。これら大名や吉原者が所有した茶道具について解明し、山東京伝と茶道文化を含む吉原文化の係わりが明らかになると考えられる。

3. 研究の方法

- (1) 山東京伝と係わりの深い同時代の大名俳人柳沢米翁の俳諧交友関係の解明のため、柳沢米翁の日記『美濃守日記』、『宴遊日記』、『松鶴日記』を中心に、マイクロフィルム、原資料にあたり資料調査を行った。米翁の日記を中心に米翁と大名との俳諧交友、江戸座俳諧宗匠との係わりを調査・分析、データベース化し、資料の翻刻・読解を行った。そこから米翁の俳諧交友を江戸座俳諧との係わりの中で解明した。このうち米翁の俳諧宗匠であった前田春來(二世青蛾)と米翁の係わり、春來が目指した宝暦期の江戸座俳諧について、春來の『東風流』を中心に、佐藤晩得の『古事記布俱路』などから考察した。
- (2) 山東京伝が係わった吉原文化圏解明のため、俳諧交友をもとにした大名と吉原者が係わった茶の湯の交流関係の解明を行った。京伝のパトロンが大名子弟松平雪川や松前文京であったことからその文化圏を考えると、当時大名の文化交流として、俳諧と茶道は欠かせないものであり、大名が係わった茶道具の伝来の調査を行った。京伝作品に見られた名物茶入を『雲州蔵帳』、『古今名物類聚』、『不昧公名物茶会記』、『不昧公御虫干控』、『万宝全書』、『大正名器鑑』、『大正茶道具』などから調査した。資料調査は慶應義塾大学図書館、国会図書館等で行い、資料の読解を行った。京伝の洒落本『通言総籙』に書かれた茶道具から大名や吉原関係者が係わった茶道名物伝来の解明を行った。

4. 研究成果

- (1) 山東京伝と係わりの深い大名俳人柳沢米翁の俳諧交友について調査を進め、このうち米翁の俳諧宗匠であった前田春來(二世青蛾)と米翁の係わり、春來が目指した江戸座俳諧について解明を行った。米翁の『宴遊日記』・『松平美濃守日誌』、佐藤晩得の『古事記布俱路』等から考察を行った。当時の大名俳諧の重鎮、柳沢米翁が春來と春來の門人米仲を師としており、加えて大名子弟の姫路藩主弟酒井抱一、秋田藩留守居役の佐藤番得も春來を

師としていた点は、非常に重要といえる。春來は、蕪村や存義ほど重要視されていない人物であったが、其角後の宝暦期の江戸俳壇においてその地位を獲得し、新しい江戸座俳諧の流れを生み出すこととなる大きな影響を与えた人物であることが明らかになった。宝暦六年に春來は『東風流』を刊行し、芭蕉の支流を目指すのではなく、其角・嵐雪を目標とするのが江戸座俳諧であるとし、其角を源流とする江戸座俳諧の復活を目指した。特に其角は芭蕉の影響のもと其角独自の俳風へと進化させ、その俳風は其角の『句兄弟』(元禄七年序)に見られるように蘇東坡や黄山谷などの宋学からの影響を典拠とする古人の句作を換骨奪胎して用いる「点化句法」を重視した作風となっていく。しかしこれら宋詩の根本理念を拠り所とした其角流の俳人たちは、宋詩を否定する古文辞学派の隆盛にともない分裂した。春來はこれらの分裂した其角の俳諧をもう一度『東風流』で目指したことを考察した。米翁は春來を生涯俳諧の師と仰ぎ、春來亡き後は春來の弟子米仲につき、その俳風を継承する。同じ春來門で後に江戸座の代表的人物となる存義は其角の俳風から移行する。これらの調査から、宝暦期の米翁を中心とする江戸俳壇の一端を明らかにした。この成果を学会発表と論文発表を行った。学会発表は、『東風流』序文について 春來(二世青峨)が目指したものとその影響(『東風流』序文について 春來(二世青峨)が目指したものとその影響(『東風流』宝暦俳書の翻刻と研究』所収、世音社(2021))としてまとめた。本書では『東風流』巻一の翻刻と巻六所収「寒梅や」歌仙評釈(名ウ1～挙句担当)、巻二所収「猪毛」歌仙評釈(名ウ1～挙句担当)も担当した。さらに中興俳諧の内実を明らかにするため、『秋の日』『鹿老て』歌仙分析(名オ1～6)(『秋の日』『鹿老て』歌仙分析)『近世文芸研究と評論』101号)を担当した。

- (2) 山東京伝の『通言総籙』に描かれた茶道具の伝来から大名子弟と戯作者、吉原関係者、俳諧師を結ぶ吉原での文化の交流が行われていたことを解明した。松平不昧ら大名や吉原者の茶道具の係わりについて、『雲州蔵帳』、『古今名物類聚』、『不昧公名物茶会記』、『遠州蔵帳図鑑』、『万宝全書』、『大正名器鑑』等の資料から分析を行い、京伝の吉原文化圏について考察した。平成三十年度は松平不昧没後二百年にあたり開催された「大名茶人松平不昧」展において、不昧が収集した茶道具の目録『雲州蔵帳』等に記載された書画・茶道具を実見し、不昧所持の茶道具と戯作の関係性について接点を発見することができた。このうち不昧お好み道具を製作していた蒔絵師羊遊齋は、姫路藩主酒井忠以弟酒井抱一の下絵をもとに蒔絵の制作をしており、大田南畝ら戯作者との係わりも持っていた。令和元年度には、三井記念美術館の「高麗茶碗」展において、『通言総籙』に登場する「御所丸」茶碗を実見することができた。

松江藩主弟松平雪川は、兄の松平不昧とも文化を共有していたことが判明した。『通言総籙』で主人公艶二郎は茶入瀧浪を購入した松平不昧をモデルとして描かれており、山東京伝は弟の松平雪川だけでなく、兄不昧とも茶道文化を通じて繋がっていたことが明らかとなった。また、名碗御所丸の古田高麗は、小堀遠州所持から吉原見番の大黒屋庄六が購入したことを『通言総籙』で喜之介が語り、この茶碗に因んだ句を姫路藩主弟の酒井抱一が詠んでいた。古田高麗は庄六所持から、同じ吉原の妓楼扇屋宇衛門の手に移り、豪商鴻池炉雪の所持となる。これらの茶道具所持の経緯から、大名子弟の松平不昧、酒井抱一、吉原者の大黒屋庄六、扇屋宇衛門、豪商鴻池炉雪らが係わりを持ち、吉原の文化交流が江戸の文化を生み出す一つの場となっていたことを明らかにした。そしてこれらの交友は俳諧交流を基盤にしていたといえる。この成果を『通言総籙』に描かれた茶道具「松平不昧と大黒屋庄六所持の瀧浪・御所丸について」(『島根史学会会報』2022年刊行予定)としてまとめた。

- (3) 今後の課題として、山東京伝と係わりの深い柳沢米翁をはじめとする大名俳諧資料は、まだ紹介されていないものも多く、膨大、多岐に渡るため、継続的な資料調査、資料研究が必要である。そのため柳沢米翁や本多清秋といった大名をパトロンとする春來や亀成ら江戸座俳諧宗匠の俳諧活動を大名子弟との繋がりの中で、引き続き調査を行っていく予定である。また、吉原者と大名子弟の茶道による文化交流についても、俳諧交流の人脈を基盤にして、調査を続ける予定である。特に松平不昧と不昧に教えを受けた姫路藩主酒井宗雅(忠以)の茶道交流は江戸文化圏を解明する重要な領域の一つと考えられるため、調査を行ってきたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 佐藤勝明、伊藤善隆、玉城司、服部直子、鹿島美里、稲葉有祐、真島望	4. 巻 101
2. 論文標題 『秋の日』『鹿老て』歌仙分析	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 近世文芸研究と評論	6. 最初と最後の頁 54-69
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鹿島美里	4. 巻 60
2. 論文標題 『通言総籙』に描かれた茶道俱一松平不昧と大黒屋庄六所持の瀧浪・御所丸について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 島根史学会会報	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 鹿島 美里
2. 発表標題 『東風流』序文についてー春來（二世青娥）が目指したものとその影響
3. 学会等名 東海近世学会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤勝明編、鹿島美里、井上敏幸、玉城司、伊藤善隆、稲葉有祐、真島望	4. 発行年 2021年
2. 出版社 世音社	5. 総ページ数 488
3. 書名 『東風流』一宝暦俳書の翻刻と研究一	

〔産業財産権〕

〔その他〕

北海道大学大学院文学研究院科研費紹介ホームページ
<https://www.let.hokudai.ac.jp/research/kakenhi>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------